

万葉集東歌紀行

江苏工业学院图书馆
藏书章

岸
哲男

三彩社

万葉集東歌紀行

岸 哲男（きし・てつお）

明治四十二年広島県生れ。毎日新聞社出版局
図書編集部長、カメラ毎日編集長、『国宝』委
員会事務局長を経て二松学舎大学、現在名譽
教授。著書『飛鳥古京』（昭四五）、『万葉山河』
（昭五一）、『万葉山河紀行』（昭六三・日本写
真協会功労賞受賞）等。論文「志貴皇子系諸
王の歌―大伴家持との交遊に関連して」（二松
学舎大学東洋学研究所集刊・昭四六）、「比売
朝臣額田について―栗原寺露盤銘の意味」（二
松学舎大学論集・昭五一）、「推古朝冠位十二
階の『当色』について」（東洋学研究所集刊・
昭五七）、「和歌山県御坊市の岩内古墳を有間
皇子墓とする説について」（二松学舎大学人文
論叢・昭五九）。

一九九〇年十一月三〇日第一刷

定価 四、〇〇〇円（本体価格三、八八四円）

著者 岸 哲男

253 神奈川県茅ヶ崎市東海岸南六―六―三九

電話 〇四六七（八二）二〇九五

発行者 真部俊生

発行所 株式会社 三彩社

107 東京都港区南青山五―十二―二四

編集部 〇三（四九九）四一一

電話 営業部 〇三（二九四）三九三一

振替 東京三―五九四一七

印刷・製本 半七写真印刷工業株式会社

© Tetsuo Kishi. 1990

ISBN4-7831-0051-9 C0072 P4000E

万葉集東歌紀行・目次

東歌について	2
一 遠江の歌	5
二 駿河の歌	9
三 相模の歌	13
四 伊豆の歌	22
五 武蔵の歌	24
六 上総の歌	34
七 下総の歌	40
八 常陸の歌	43

九 信濃の歌	49
二 上野の歌	55
二 下野の歌	68
三 陸奥の歌	70
案内地図	73
東歌全歌	74
撮影・交通メモ	83
あとがき	86

東歌じつじふ

万葉集東歌は、古代東国の農民が酒盛りや歌垣で、または橋をかける、道路を作るなど共同作業をするときに、声を合わせて歌いはやした民衆歌謡——民謡である。手を打ち足踏み鳴らすその場の熱気のなかから自然発生的に生まれた即興歌謡だから、作者はだれともわからなくなり、民衆の共有財産として口伝えに歌いつがれた。彼らはそれを書き記す文字をまだ持っていなかった。

東歌は東海道に属する遠江にはじまって駿河、伊豆（いずれも静岡）、相模（神奈川県）、武蔵（東京・埼玉）、上総、下総（ともに千葉）、常陸（茨城）の八国と、東山道に属する信濃（長野）、上野（群馬）、下野（栃木）、陸奥（福島）の四国の順に計十二国の歌が集められている。甲斐と安房の国の歌はない。古代には、大和から見て東海道の鈴鹿の関（伊勢）、東山道の不破の関（美濃）以東を広く東の国とする漠然たる考えかたがあった。この十二国はそれに従ったもので、「東歌」が「辺境の地の歌」という意味で用いられたのではない。

巻十四に一括して収められた歌はすべて短歌で二百三十首、それぞれのお国訛りや方言がそのま

ま詠みこまれていて、不思議な音効果をあげており、素朴というよりも粗野なくらいの生命感にあふれ、数首を除くほかは、すべて男女間の交情を歌った恋愛歌ばかりである。この異境的な歌のめざらしさや魅力にひかれ、それを書きとめて都へ持ち帰ったのは、中央政府から派遣されてきた国司や公用でくだった官人たちであった。また郡司に任ぜられていた地方豪族の子弟たちも、それを書きつける文字を知っていた。郡司の妻たちでさえ、都へ帰る上司に餞別の歌を贈った例が巻二十にある。それらの東国の歌は一字一音の表音文字、いわゆる万葉仮名で記され、そのため東国の特殊な語形や貴重な方言がいまに残った。

東歌は民謡でなく、東国民衆の個人的創作歌だとする説もあるが、やはり民謡説に従うべきであろう。また東歌の収集と編纂は大和朝廷の手による官府の業だろうとされるが、よく見ると歌の整理と分類にずさんなところがあり、東国のなかでぬけている国があるなど、かならずしも官撰ではないと思われる。はじめ国司たちがそのつど持ち帰った歌、または都からの旅行者が書きとめた歌、

あるいは政府に納める調・庸を運んで大和に來た行役の農民や、宮城の左右衛士府の兵として上番した東国農民らの歌が都人によって記録されたものなど、さまざまな経路で集められた何種類もの東国歌集があったと思われる。それを一つに集めて異色の一卷とし、おおまかに「雑歌」と「相聞」に分類したものが巻十四の原形であつたろう。その時期が和銅六年（七二三）以後と推定されるのは、この年完成した吉蘇路が「今の壑道」として、信濃国歌のなかに詠まれているからである。のちに手を加えて国別判明歌と国名のわからない末勘国歌に二大別し、さらにそれに雑歌、相聞、譬喩歌、防人の歌、挽歌の部立てをほどこして整備、編纂したのがおそらく大伴家持であつたと思われる。

東歌の特徴は、そのほとんどが上の句でその国の名や土地の名、自然の景物などを同音や類音をくり返しながら表現して長い序詞とし、下の句で一挙に、意味的には飛躍して心情を述べるといのがそのパターンである。そしてこの東歌と、主として大和地方の民謡を集めた巻十一、十二のそれとを比べると、同じ民謡ではあつても、大和の民謡には東歌のような泥くさがなく、感覚もス

マートである。

七世紀の終り八世紀はじめのころ、都から遠い東国の農民集団が、五音七音をくり返すリズムをすでに体得してこれだけの歌を作り、それがまともに残されている例は西欧の文学にもないと思う。しかも花鳥風月を詠じたものは一首もなく、すべて生活者の歌であり、野性的な愛欲の歌ばかりで、なかには民謡というより創作歌として見られる秀作もある。

日ごろの労働のつらさを、彼らは酒盛りで発散させる。そこで男は女に呼びかけ、女たちもひるまず打ち返す。男女がたがい求め合う歌のかけあい、集団の歌声、それが東歌である。大和地方ではそれを歌垣と言ひ、東国では唄歌会と言つた。そこにはたくましい感情、直情の流露があり、暗い影がない。律令制のもとにがちりと組みこまれ、搾取の対象でしかなかった農民たちにとって、性の自由だけは彼らのものであつた。そして性はいかしくしたり恥じたりすべきものでなく、おほかたであけつびろげで、皆から祝福されるべきものであつた。いまわれわれは暖く着て不足なく食べているが、彼らのように一日一日を全力的に生きていくとはいえないのではなからうか。



①伎倍の林 あらたまの伎倍の林に汝を立てて行きかつましじ眠を先立たね

一 遠江の歌 とわつおゐ

遠江の東歌は、相聞に伎倍を歌ったもの二首、譬喩歌に浜名湖畔の引佐細江を歌ったものの一首の計三首あるが、未勘国歌のなかにはり湖畔の尾奈の地を歌ったものがあってそれを加えると四首になる。四首とも海岸でなく内陸部の歌なのは、むしろ内陸のほうが物産も豊かで人口も多かったためであろう。歌は人の集まるところに生まれるものである。

あらたまの伎倍の林に汝を立てて行き

かつましじ眠を先立たね(三三五三) ①

伎倍人の斑衾に綿さはだ入りなましも

の妹が小床に(三三五四)

浜松から私鉄の遠州鉄道で北上十キロ、貴布祢駅で下車すると、一帯は広々とした農村で、現在は浜北市に属しているが、古代ここは龜玉郡であった。伎倍の地名はいまは失われてしまったが、「あらたまの伎倍」はここ貴布祢であろうという。「あらたまの伎倍の林にお前さんを立たせて、待たせてしまったが、今夜は行けそうもない。先に寝ておくれ」というほのぼのとした男の歌である。二首目の「伎倍人」は、なにか特殊の技能を持つ部族の名かともいわれるがよくわからない。「伎倍の人たちは豊かで、色模様のある寝具の衾に綿(この時代は絹綿)がたくさんはいっているというが、そのようにはいりたいものだ、妹の寝床に」という、これも男の歌である。貴



②引佐細江 遠江引佐細江の漕標吾を頼めてあさましものを

布祢はいま開発が進んで東歌の伎倍の林などどこにもなく、この林は北へ遠くはずれて尾野付近で見つけた。

遠江引佐細江の漕標吾を頼めてあさま

しものを(三四二九) ②

花散らふこの向つ嶺の乎那の嶺の洲に

つくまで君が齢もがも(三四四八) ③

「遠つ淡海」と呼ばれた浜名湖の、いちばん奥まった湾入部の東北隅に、引佐郡細江町と引佐町が隣接している。細江町気賀は御油宿からきて湖の北岸を伝い見附宿へ抜ける姫街道(約五八キロ)の宿場で、関所の跡も残っている。毎年四月の第一土・日曜日に催される「姫様道中行列」は有名である。そこに都田川が流れこみ深く細長い入江を作っていて、両岸は水際まで竹やぶに掩われ、小さな漁船がひっそりとつながれている。水路をしめす標木の漕標(水脈つ串)のあいだを、ボラが悠々とすりぬけていくのが見えたりする。

歌の意は「遠江の引佐にある細江の漕標がときどき変つてあてにならぬように、お前さんを頼りにわたしを思わせておいて、ほんとは浅い心であつたのだ」と、男を恨む女の歌である。「あさまし」はよくわからないが、「浅さまし」だろうという。この湖岸の宿駅の女が、客を相手の宴席などで歌ったものではなからうか。

二首目は、浜名湖の奥にあつて、わずか一〇〇メートルの幅の瀬戸で仕切られ、半ば独立している猪鼻湖西北岸の尾奈の歌である。



③乎那の嶺 花散らふこの向つ嶺の乎那の嶺の洲につくまで君が齢もがも

ここは引佐郡三ヶ日町で、東名高速の三ヶ日ICで下りれば二キロの近さである。上尾奈、下尾奈ともに湖岸の広い砂洲にできた漁村で、下尾奈の砂嘴の上に立つと対岸の集落の背後に尾奈の嶺である浅間山が見える。「花の散るこの向いの峯の尾奈の山が、時がたつてこの湖岸の砂洲に漬くようになるまでも、あなたの寿命が長くあつてほしいものです」と、相手の長寿を祈って歌った民謡である。おおげさな言いかたなのは、これが祝儀の歌であり、東歌の特徴の一つでもあるから仕方がない。

犬養孝氏の『万葉の旅』（中巻）には、この乎那の嶺を「下尾奈西山、上尾奈北方の板築山（高さ二三メートル）の山系をさすものである」としておられるが、土地の人に聞くと、尾奈の背後の山といえばそれは浅間山のことだという。それで本書では浅間山としたが、犬養さんののも私のも、写真に写っている山は同じである。

浜名湖の北岸一帯は早くから開かれて貝塚や古墳が多く、また三ヶ日町で発見された化石人骨は十萬年前旧石器時代のもので三ヶ日人と呼ばれ、豊橋近郊で発見された二十萬年前の牛川人、浜北で発見された五萬年前の浜北人などともによく知られている。この浜北人は五等身で、男は身長一五〇センチ、女は一三五センチだったという。



④富士の柴山 天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はずかもあらむ



⑤富士の裾野 富士の嶺のいや遠長き山路をも妹許とへば日に及ばず来ぬ

二 駿河の歌

同じ静岡県だが、大井川を渡ると駿河の国である。古代の官道である東海道は、西から焼津、静岡、清水、由比、蒲原を経てこんどは富士川を渡り、右へ海岸づたいにいけば沼津で、そこからは北上して御殿場に至り、足柄峠を越えて相模の国へ出た。

一方、富士川から左へ折れて東北に道をとれば十里木街道で、富士山の裾野を横切り愛鷹山の裏を抜けてこれも御殿場に出た。

しかし平安時代まで沼津の西方一帯は浮島ヶ原と呼ばれた湿地帯で、容易に人を通さなかったから、万葉時代の旅人は、任官して東国に下だる国司たちも、調や庸を都へ運ぶ農民たちも、同じく召されて西辺の防備に向かった防人たちも、みなこの十里木街道を往来

したと思われる。沼津へまわるよりも、この方が道は近い。だが沼地がないかわり、こちらには砂礫の道であった。

駿河の歌は相聞に五首、譬喩歌に一首あるが、そのうち四首が富士山を詠んだものである。

まず、富士山の歌がかためて最初におかれている。

天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はずかもあらむ (三三五五) ④

富士のふもとの柴山に女を待たせておいたのに、刻々と木立の茂みが暗くなっていく。約束の時間が過ぎたなら二度と逢えないだろうといって、創作歌に近い清純な歌である。「うつる」は「うつる」の訛りである。もう一つの解釈は、木立の茂みの季節を利用しているも逢うのに、時移って落葉のころになれば隠れ場がなくなってしまうことができないという





⑥富士の高嶺 き寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如

のだが、このほうがむしろ民謡らしくなるかもしれない。いずれにしてもこれと同じ状況を歌った大和の民謡の「わが背子を今か今かと待ちをるに夜のふけぬれば歎きつるかも」(巻十二・二八六四)という洗練された歌などに比べると、富士、柴山、木立の闇など実景の風物を詠み入れ、発想に土の匂いがするのはやはりこれが東歌の特色である。

私はこの歌にふさわしい場面として御殿場付近を想定し、雑木林の向こうに富士の暮れていく風景を探したが、いまは別荘などがふえてもう写真にならない。ここに掲げたのは箱根から三島にくだる途中の三ツ谷新田の段丘で、白く光るのは千大根である。

富士の嶺のいや遠長き山路をも妹許とへば日に及ばず来ぬ(三三五六) ⑤

富士山の遠い山道も、愛するあの娘のもとへと思えば、日数もおかずにまたやってきたというのである。「けによぶ」には別の解釈があって、ケ接頭語+ニヨブ呻吟する、つまり息も切らずにやってきたという意味だとする。どちらがいいか判断に迷うところだ。この男の訪ねる娘は御殿場にいるものと想定して、写真は乙女峠からその遠長き道を見下ろした風景である。

霞ある富士の山傍にわが来なば何方向きてか妹が歎かむ(三三五七)

公用かなにかで、妻と別れて男は遠く旅立つ。霞のかかっている富士山のほとりまできたならば、わたしの姿が見えなくなるので、



⑦駿河の海 駿河の海磯辺に生ふる浜つづら汝をたのみ母に違ひぬ

見送る妻はどちらを向いて歎くだろうという
あわれて美しい調べの歌である。

さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富

土の高嶺の鳴沢の如(三三五八) ⑥

ともに寝た夜は(玉をつらぬく緒ほどの)

短い時間なのに、恋しい胸のうちは富士の高
嶺の鳴沢のようにはげしくとどろいています
と燃える思ひをのべた男の歌である。一直線
に詠みくだして、調子の張ったすばらしい歌
だ。鳴沢をいまの大沢崩れだとし、落石がと
どろく音のことだとする説もあるが、ここは
普通名詞にとつて富士山麓のはげしい溪流と
見たほうがよい。

この歌は当時人々に愛誦されたらしく或本
の歌、一本の歌として伝誦された替え歌二首
がある。掲出の写真は御殿場の富士演習場か
ら見た真冬の夕焼富士である。

駿河の海磯辺に生ふる浜つづら汝をたの

み母に違ひぬ(三三五九) ⑦

駿河の海の磯辺(おしべはこの地方の訛り)
に生える蔓草は長くて絶えない。そのように
思つてわたしはお前さんを頼りにしたため、
母の心にそむいてしまったと歎くむすめのか
れんな歌である。駿河湾に面して興津、由比、
蒲原のあたりで広い砂浜があり、蔓草のハマ
ゴウなどが咲いている場所といえは、東海道
線新蒲原駅下車、富士川河口に開けた吹上浜
しかない。

六月はじめの風の強い小雨の日、吹きつけ
る砂に顔も手もざらざらになりながら、荒涼



⑧志太の浦 志太の浦を朝漕ぐ船は因なしに漕ぐらめかもよ因こさるらめ

たる砂丘を歩きまわってこの情景を得た。画面の左方からくる水は富士川、右は駿河湾である。

志太の浦を朝漕ぐ船は因なしに漕ぐら

めかもよ因こさるらめ（三四三〇）⑧

この一首は譬喩歌の中にあり、志太の浦は駿河と遠江を境する大井川の河口、いまの志太郡大井町の港付近と見られている。施設のととのった漁港である。

志太の浦を朝早く漕いでいる船がいる。あの船は何の理由もなしに漕いでいるのではあるまい、きつとわけがあるのだらうよ、といって、女のもとから急いで朝帰りする役人を土地の漁師たちが弥次っているのであらう。あるいは、朝早くから船を漕いで女のもとへ出歩く男を弥次っているのかもしれない。「因こさるらめ」は「因こそあるらめ」のつづまったものである。

もう一首、未勘国家のなかに阿倍を歌ったものがあり、古代の駿河国安倍郡、いまの静岡市周辺の民謡かといわれる。安倍川の河口にあたり、駿河の国府もここに置かれていた。

坂越えて安倍の田の面に居る鶴のとも

しき君は明日さへもがも（三五二三）⑨

安倍の田の面にめずらしくも鶴が下り立っている。あの坂を越えて飛んできたのだらう。あなたの今日おいでになったのも、めったにないことだ。どうか明日もおいでになつてくださいという、まれに逢い得た女の立場の歌である。第三句までの序詞も気がきいている



⑨安倍の田 坂越えて安倍の田の面に居る鶴のともしき君は明日さへもがも

し、調べますがすがしい。

安倍川河口付近は工場と住宅が密集している、とても鶴のくる水田らしいものはない。やむなく私は安倍川、藁科川の合流点までさかのぼり、その川洲にこんもりと盛りあがる枕草子の木枯の森（二〇七段）を見たのち、あきらめきれずに川を向う岸に渡った。そしてはじめて出会った静かな水田に、白鷺が一羽たたずんでいるのを見た。鶴でこそないがそれはまさしく「安倍の田の面に居る鷺」であつた。

三 相模の歌

足柄坂から東の国を総称して、古くは「あづま」といった。そのいわれを古事記はつぎのように語っている。

倭建命は相模の賊を征したのち、走水（横須賀）から対岸の上総へ渡ろうとしたが、暴風が吹き起って進むことができなかった。そのとき、妃の弟橘比売命が身代りとなって海に身を投じ、無事に渡ることができた。命は東北の蝦夷を平定して大和へ帰るとき、ふたたび相模の国を過ぎ、足柄坂の上に立って東をふり返り、三たび歎いて「阿豆麻はや」と仰せられた。故にその東の国々を名づけて「あづま」という。



⑩足柄坂の神 足柄の御坂畏み曇り夜のあが下延へを言出つるかも

同じ説話が、日本書紀では上野の碓日坂で
のこととして伝えられる。命は弟橘媛を偲ん
で東南をふり返り、三たび歎いて「吾嬬はや」
と仰せられた。故に山東の国々を名づけて「吾
嬬国」という、と。また常陸国風土記も「足
柄の岳坂より東の諸の国、惣べて我姫の国と
称ひき。この当時、常陸と言はず」つまり常
陸という国の名は、まだそのころはなかった、
といている。

古代大和朝廷の東国経営の拠点、毛野
(上野、下野)であったと思われる。前橋市の
天神山古墳は大和の三輪山麓の古式古墳と同
じ形態であり、また五面の銅鏡などその副葬
品は、高崎市の倉賀野出土の環頭大刀の柄頭
とともに、中央派遣の強大な政治勢力がすで
にこの地に及んでいたことを示している。上
毛野氏が地方豪族の雄として、大和朝廷で重
きをなしていたことも知られている。

そこで、和名抄に「辺鄙」の語を「阿豆万
豆」と訓ませ、注に未開の地と人の意だと
し、「阿豆万」とは「坂東諸国の如きを謂う」
とあるように、もともと中央から見て辺鄙で
立ちおくれた国という意味で毛野は「あづま」
と呼ばれ、ひいて広く東国全体をさすように
なっていたのであろう。記紀の倭建命の地
名伝説はそのあとに作られたのである。

また足柄坂の東、碓日坂の東の国々は、総
称して「坂東」と呼ばれたが、平安時代に入
って昌泰二年(八九九)、諸国に起った群盗に
備えて足柄坂と碓日坂に関所が設けられての